

氏 名	ふじ 藤 田 み さ お
学位(専攻分野)	博 士 (社会健康医学)
学 位 記 番 号	社 医 博 第 13 号
学位授与の日付	平 成 18 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	医 学 研 究 科 社 会 健 康 医 学 系 専 攻
学位論文題目	A model of donors' decision-making in adult-to-adult living donor liver transplantation in Japan: Having no choice (日本における成人間生体肝移植ドナーの意思決定モデル:これしかない)
論文調査委員	(主 査) 教 授 木 原 正 博 教 授 坂 井 義 治 教 授 今 中 雄 一

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

1989年に第1例目が実施されて以来、わが国では約50施設で2600例を超える生体肝移植が行われてきた。従来、成人から小児肝不全患児への移植がほとんどであったが、近年、脳死ドナーの不足や技術の向上により、成人間での移植数が急増するようになった。それに伴い、成人間生体肝移植の生物医学的側面については幅広い研究が報告されてきたが、心理・社会的側面についての研究は未だ数少ないのが現状である。兄弟間や子供から親など成人間の移植では、ドナー決定のプロセスにおいて、さまざまな葛藤や家族間の軋轢の生じることが推測される。そこで本研究は、成人間生体肝移植におけるドナーの意思決定過程を質的に検討し、概念モデルとして構築することを目的とした。

【方法】

京都大学医学部附属病院にてすでに生体肝移植のドナーとなった22名(男性15名、女性7名、平均年齢 37.9 ± 10.1 (SD) 歳)を対象に、個別の半構造化面接(平均48分、最短20分、最長77分)を行い、手術を迎えるまでの心理的な経験について尋ねた。面接の内容は文書による了承を得たうえで録音、逐語録を作成し、Grounded Theoryに基づき質的分析を行った。

【結果】

臓器提供へとドナーを動機づけていたのは「これしかない」という現状認識であり、この認識は4つのドナー心理—「命が最優先」であり、手段が「生体移植しかない」以上、他ならぬ「家族のため」なら、ドナーになるのは「自分しかない」—で構成されていた。実際にドナーになった者にとって臓器提供は「これしかない」、つまり、するかしないかといった選択のできないものとして認知されており、このことが生体肝移植におけるドナーの意思決定過程を特徴的なものにしていった。ドナーの現状認識「これしかない」を中心に構築した意思決定モデルは、5段階から構成されている:(1)認知(「これしかない」と認知する)、(2)消化(不安や葛藤を経験しつつ現状を消化する)、(3)決意(ドナーになることを決意する)、(4)強化(決意を肯定、維持、強化する)、(5)覚悟(手術を受けることを覚悟する)。第2段階と第3段階は、「心を決める局面」、第4段階と第5段階は「移植に向かう局面」として説明することができた。

【考察】

本研究は、成人間生体肝移植ドナーの意思決定過程全体を説明する概念モデルを提示した。ドナーの意思決定は、複雑な心理・社会的な要因に影響され、葛藤や不安を伴いながら行われるものである。困難な意思決定に直面するドナーの心を理解し、適宜適切なサポートを提供しようとする医療者にとって、本研究が提示する概念モデルは実践にも役に立つものとなるだろう。移植医療における心理・社会的サポート体制を充実させていくことは、これからますます増え続ける当該医療の質の向上につながっていくと考えられる。

論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、成人間生体肝移植におけるドナーの意思決定過程を質的に検討し、概念モデルを構築することである。京都大学医学部附属病院にて生体肝移植のドナーとなった22名を対象に、個別の半構造化面接を行い、手術を迎えるまでの心理的な経験について尋ねた。面接の内容は文書による了承を得たうえで録音、逐語録を作成し、Grounded Theoryに基づき質的分析を行った。臓器提供へとドナーを動機づけていたのは「これしかない」という現状認識—「命が最優先」であり、手段が「生体移植しかない」以上、他ならぬ「家族のため」なら、ドナーになるのは「自分しかない」という4つのドナー心理で構成される一であった。ドナーに特徴的な認識「これしかない」を中心に構築した意思決定モデルは、次の5段階から構成されている：(1)認知、(2)消化、(3)決意、(4)強化、(5)覚悟。第2段階と第3段階は、「心を決める局面」、第4段階と第5段階は「移植に向かう局面」として説明することができた。本研究の提示する概念モデルは、困難な意思決定に直面するドナーの心を理解し、適宜適切なサポートを提供しようとする医療者にとって、実践上でも役立つものと考えられる。以上の研究は、成人間生体肝移植におけるドナーの意思決定過程の質的な解明に貢献し、移植医療の心理・社会的サポート体制の充実と質の向上に寄与するところが多い。

したがって、本論文は博士（社会健康医学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、本学位授与申請者は、平成18年2月16日実施の論文内容とそれに関連した諮問を受け、合格と認められたものである。